

上演詞章

能楊貴妃

*囃子方着座し、宮の作り物にシテ入り、引廻し掛けて大小前へ置く。

ワキ 我がまだ知らぬ東雲しのめの。我がまだ知らぬ東雲しのめの。道をいづくと尋ねん。

これは唐土玄宗皇帝たうていせいに仕へ申す方士ほうしにて候。さても我が君 政 正しくまします中に。また色を重くし艶えんを専せんらとし給ふにより。容色無双むそうの美人を得給ふ。

御寵愛ごちゆうあい双ふたび無し。則ち貴妃きひに定めらる。楊家の御娘ごにやうたるが故に

其の名を楊貴妃と号す。然れどもさる事有りて馬嵬ばがいが原にて失ひ奉りて候。

帝御歎なげき限り無し。せめての御事に魂魄こんぱくのありかを尋ねて参れとの勅詔しやくしよくに任せ。

上碧かみ落下せし黄泉せきまで尋ね申せども。更に魂魄こんぱくのありかを知らず候。

未だ蓬萊宮ほうらいきうに至らず候程に。急ぎ彼の島に渡り。御行くへを尋ねばやと存じ候。

尋ね行く。幻まぼろしもがな傳つてにても。幻まぼろしもがな傳つてにても。魂たまのありかはそことしも。

浪路なみのぢを分けて行く船ふねの。ほのかに見えし島山の。草の仮寝かりねの枕まくら結むすぶ。

常世とこよの国くにに着つきにけり。常世とこよの国くにに着つきにけり。

ありし教きやうに随したがつて此こゝの蓬萊宮ほうらいきうに来て見れば。宮殿盤々きんたんとして更に邊際へんさいも無く。

莊嚴しやうげん魏々ゑいゑいとしてさながら七宝しちほうを鏤ちりめたり。漢宮かんきう萬里まんりのよそほひ。

長生驪山ちやうせいりしやんの有様ようさまも。これには更になぞらふべからず。あら美しの處ところやな。

教きやうの如く太眞殿たいしんてんと誌しるしたる額がくの候。暫く此こゝのあたりに徘徊はいかいし。事の由よしをも

窺うかがはばやと存ぞんじ候。

シテ あら物凄の、宮中やな。あら物凄の、宮中やな。

昔は驪山の春の園に。共に眺めし花の色。移れば変る習いとて。

今は蓬萊の秋の洞に。獨り眺むる月影も。濡るる顔なる袂かな。

あら恋しの古やな。

ワキ いかに此の宮の中に申すべき事の候。唐の天子の勅の使。

方士これまで参りたり。玉妃は中にましますか。

シテ なに唐帝の使とは。何しにこれまで来れるぞとて。九華の張を押し除けて。

玉の簾すだれをかかげつつ。

ワキ 立出で給ふ御姿を見れば。

シテ 雲の鬢びんつら

ワキ 花の顔ばせ。

シテ・ワキ 寂寞しやくせたる御眼の中に。涙を浮かめさせ給へば。

地謡

梨花一枝、雨を帯びたる粧まの。雨を帯びたる粧まの。太液たいえきの。芙蓉の紅。

未央ひよの柳の緑も。これにはいかで優るべき。げにや六宮ふんたいの粉黛ふんたいの。

顔色の無きも理や。顔色の無きも理や。

ワキ

勅諭の趣真直に申し上げ候。さてもさても后宮世うしろみやうせいにましましし時だにも。

朝政怠り給ひぬ。況いわやくく、ならせ給ひぬる後は。唯ひたすらの御歎に。

御命も危くみえさせ給ひて候程に。せめての御事に魂魄たまのありかを尋ねて

参れとの宣旨のたまひを蒙り。これまで参り御姿を拝み奉ること。唯これ君の御志。

浅かざりし故と思へば。彌々よよ御痛はしうこそ候へ。

シテ

げにげに汝が申す如く。今はかひ無き身の露の。数にもあらぬ魂たまのありかを。

かやうに尋ね給ふこと。御情には似たれども。問ふにつらさの増さり草。

枯れ枯れならばなかなかの。便りの風は怨めしや。また今更の恋慕の涙。

旧里を思ふ魂を消す。

ワキ

さてしもあるべきことならねば。急ぎ帰りて奏聞せん、さりながら。御形見のものをたび給へ。

シテ

これこそありし形見よとて。玉の釵かんざし取り出し。方士あたに與へたびければ。いやとよこれは世の中に。類ひ有るべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。

ワキ

御身と君と人知れず。契り給ひし言の葉有らば。それを證しめしに申すべし。

シテ

げにげこれは理なり。思ひぞ出づる我も亦また。其の初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも。

地謡

天に在らば願はくは。比翼の鳥とならん。地に在らば願はくは。連理の枝とならんと誓ひし事を。密ひそかに伝えよや。私語ひそめごとなれども。今洩れ初むる涙かな。

されども世の中の。されども世の中の。流転生死の習とて。

其の身は馬嵬に留まり。魂は仙宮に至りつつ。比翼も友を恋ひ。

獨り翼を片敷き。連理も枝朽ちて。忽ち色を変ずとも。同じ心の行くへならば。

終の逢瀬を。頼むぞと語り給へや。

ワキ

さらばと云ひて出船の。伴なひ申し帰るさと。思はば嬉しさの。猶如何ならん其の心。

シテ

我は又。何なかなかに三重の帯。廻り逢はんも知らぬ身に。よしさらば暫し待て。ありし夜遊を為すべしや。

地謡

げにや驪山の宮みやの中。月の夜遊の羽衣ういの曲。

シテ

其の翳かげしにて舞ひしとて。又取翳し。

地謡

さす袖の。

シテ

地謡

そよや霓裳びせう羽衣の曲。そよや霓裳羽衣の曲。そぞろに濡るる袂かな。

シテ 何事も。夢幻の戯たわむれや。

地謡 あはれ胡蝶の舞ならん。

《イロエ》

〔序〕

地謡 それ過去遠おとと々の昔を思へば。いつを受生うけいきの始めと知らず。未来永なが々の流なが転ころ。

更に生死の果ても無し。

〔サシ〕

シテ 然るに二十五有うの中。いづくか生者必滅の理に洩れん。

地謡 まづ天上の五衰より。北州の千年終に朽ちぬ。

シテ 況や老生不定ふじやうの境。

地謡 歎きの中の。歎きとかや。

〔曲〕

我もそのかみは。上界の諸仙たるが。往昔おとじやくの因ちなみ有りて。仮にんがいに人界に生れ来て。楊家の深窗しんそうに養はれ。未だ知る人無かりしに。君聞きここし召よされつつ。

急ぎ召し出し、后宮に定め置き給ひ。偕老同穴かいらうどうけつの語らひも。

縁ゆかり尽つきぬれば徒たがに。又此の島に唯一人。帰り来りて住む水の。

あはれ儂おろき身の露の。たまさかに逢あひ見たり。静かに語れ憂うれき昔。

シテ さるにても。思ひ出づれば怨み有る。

地謡 其の文月の七日の夜。君と交かわせし睦言むつごの。比翼連理の言の葉も。

枯れ枯れになる私語の。笹あしの一夜の契あてだに。名残は憶おもふ習なるに。

ましてや年月。馴なれて程ほど経たる世の中に。さらぬ別れの無かりせば。

千代も人には添そひてまし。よしそれとても遁のがれ得ぬ。会あ者定離あやひりぞと聞く時は。

会あふこそ別わかれなりけれ。

羽衣の曲。

《序ノ舞》

シテ 羽衣の曲。稀にぞかへす。少女おとめこ子が。

地謡 袖打振れる心しるしや。心しるしや。

シテ 恋しき昔の物語。

地謡 恋しき昔の物語。尽くさば月日も移り舞の。證の釵かんざしまた賜りて。

暇申してさらばとて。勅使は都に帰りければ。

シテ さるにても、さるにても。

地謡 君には此の世。逢あひ見ん事も。蓬が島つ鳥。浮世なれども恋ひしや昔。

儂うづなや別れの常世の臺うづなに。伏し沈みてぞ。留まりける。